

れき じん

# となん歴民だより vol.7

Morioka tonan folklore museum

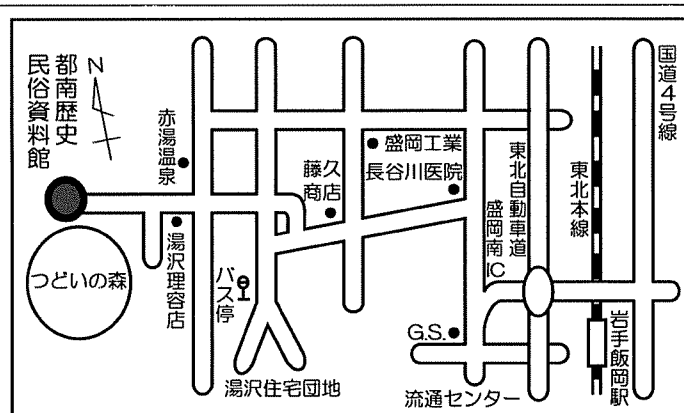
平成 18 年 6 月 20 日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 TEL019-638-7228



当館所蔵写真パネルより「田植」

## MAP ☆ACCESS



### — もくじ —

- ・ 玉山歴史民俗資料館紹介
- ・ 平成 18 年度行事予定
- ・ 指定文化財紹介⑦
- ・ 寄贈・寄託資料
- ・ 民具・農具を貸出します！
- ・ 17 年度入館者の感想から
- ・ 資料は語る⑦
- ・ となんの昔ばなし⑦

### ○利用案内

開館時間 午前 9 時から  
午後 4 時まで  
入館料 無 料  
休館日 月曜日  
(休日に当たるときは、  
直近の平日)  
年末年始

# —盛岡市玉山歴史民俗資料館紹介—

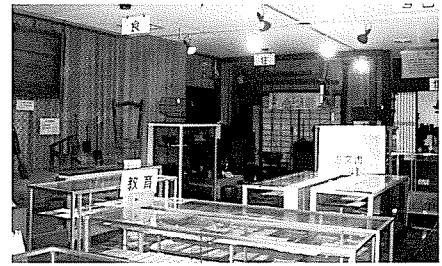


資料館外観

## 資料館の成り立ち

教育の一環として巻堀小学校の児童、地区民が収集した土器・石器、民具など多数の資料が郷土資料室に展示されていましたが、創立百周年の記念事業として文化遺産を永く保存活用するため、別棟の記念資料館建設計画が進められました。この計画はやがて旧玉山村の郷土資館としての計画に発展し、寄付金や敷地提供などの地元協力に呼応した旧玉山村の熱意は県、文化庁の認めるところとなり、それぞれの助成のもとに玉山村歴史民俗資料館ができました。現在では旧玉山村と盛岡市との合併に伴い、盛岡市玉山歴史民俗資料館になっています。

- ・開館時間：午前9時～午後4時(見学には事前に予約が必要です。)
- ・休館日：毎週月曜日(祝日のときは翌日)、年末年始
- ・入館料：無料
- ・所在地：盛岡市玉山区巻堀字巻堀 33-2
- ・お問合せ先：済民文化会館(019-683-3526)
- ・主な所蔵資料：考古資料、歴史資料、民俗資料



資料館展示室

## 参考・引用資料／

玉山村歴史民俗資料館パンフレット

## 平成18年度 都南歴史民俗資料館行事予定

### 史跡・文化財めぐり



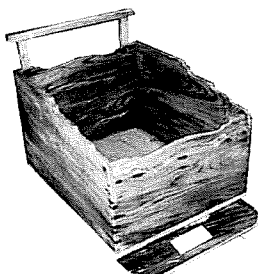
当資料館は郷土の歩みについての理解を深めるため、史跡・文化財めぐりを、毎年6月と9月の2回行っています。今年度は、6月には盛岡市から鹿角市に至る鹿角街道、9月には盛岡市から紫波町に至る稲荷街道に沿った史跡を巡ります。参加費：3,800円です。お申し込みなど詳しくは「広報もりおか」6月15日号と9月15日号にそれぞれ掲載予定です。また、ホームページ「ウェブもりおか」でもお知らせします。ぜひご参加下さい。

### 体験学習「土人形の絵付け」

平成17年7月29日(土曜日)、当資料館にて体験学習「土人形の絵付け」を行います。対象：小中学生とその保護者。参加費：200円です。お申し込みなど詳しくは「広報もりおか」7月15日号に掲載予定です。また、ホームページ「ウェブもりおか」でもお知らせします。ぜひご参加下さい。



### 特別企画展「運ぶ道具」



今年度の企画展は運ぶ道具をテーマにして9月1日～10月31日の期間で開催します。「運ぶ」と言う行為は、人々のくらしのあらゆる側面に関わる最も基本的な労働のひとつです。単純なものは、じかに手に持ったりすることですが、より効率よく運ぶために運搬具を使います。運搬具は人力によるもの、牛や馬などの畜力によるものなど、その運搬方法とともにバラエティに富んでいました。現在では、トラックなどの動力運搬で大量輸送が可能になり、便利になっています。この特別企画展では、人力や畜力による運搬具を通して、当時の苦勞を感じていただきたいと思います。

## 盛岡市所在指定文化財紹介 ⑦

### がしほうれいくようとう 盛岡市指定文化財 餓死亡霊供養塔

平成元年(1989)4月10日指定 盛岡市名須川町

この供養塔には「四百九十男女餓死亡霊等」と刻まれており、天明3年(1783)11月20日より、天明4年(1784)3月8日までの間に、東頭寺で行った粥の炊き出しに集まった飢民のうちから出た490人の餓死者の亡霊をとむらったものである。



文化7年(1810)はその27回忌にあたり、当寺18世の高倅和尚が亡霊供養のために建立した石塔で、当地の大飢饉の惨状を物語る重要な石碑です。

台石があり、石材は花崗岩で、自然石の前面を石碑として加工したものです。

高さ189cm 幅110cm 厚さ30cm

引用資料/

盛岡市教育委員会 「盛岡の文化財」 1997

昔の暮らしを見つめてみよう

—学校や地域活動団体などへ—

## 農具・民具を貸出します!

当資料館所蔵の民俗資料を学校や子ども会、地域活動などの場で広く役立てていただくために、資料の一部を貸出します。

長い歳月のあいだ使い込まれてきた資料一つ一つにはその家々の暮らしぶりや手づくりの道具に対する

使い手の愛着が見えてきます。児童・生徒のみなさんは、古さのなかに新しい発見が、当時子どもだった皆さんは、懐かしさと感動が得られることと思います。

資料の借受を希望する場合は、当館にご連絡下さい。



資料が身近になるといろいろなことがみえてくる

## 寄贈・寄託資料

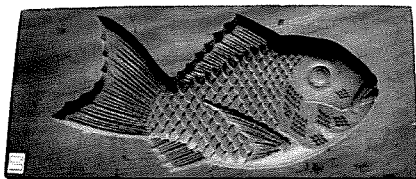
### 「17年度に寄贈または寄託された主な資料の紹介」

資料館や博物館では、将来の教育や研究などに役立てることを目的として、資料の収集と保存を行っています。

ここでは17年度に寄贈された資料のうち、主な資料を紹介します。

#### 落雁型

落雁(麦こがし・いり粉などを砂糖・水あめでねり、固めた干菓子)を作る際に用いた型。



#### 蠟燭(ろうそく)

紙縹(こよ)りを芯に蠟(ろう)で固めた火を燈(とも)す道具。

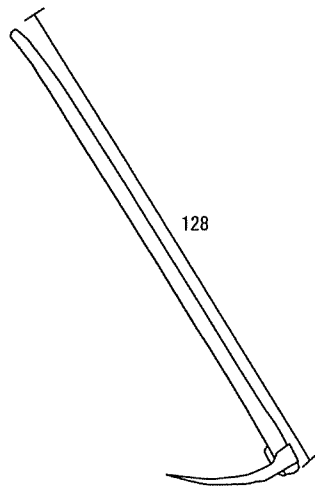


## 17年度入館者の感想から

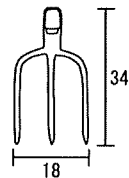
- ・ 都南の歴史の流れを見ることができました。耳でも聞ければもっと分かり易いと思います。(55才・男性)
- ・ とても勉強になりました。時間を忘れてじっくりと見ました。祖母が懐かしがっておりました。(46才・女性)
- ・ ここで初めて見させて頂いた物がたくさんあり、新たに当時の暮らしぶりが分かり、とても楽しく見学させていただきました。再度来館させて頂きたいと思います。(57才・女性)
- ・ ぼくは、昔の物がいっぱいあって、とてもびっくりしました。とくにすごいと思ったものはキネがとても大きくて重かったことです。あといろいろなお面があってすごいと思いました。昔の人はすごい苦勞をしたのがよく分かりました。(9才・男児)
- ・ いろいろな道具・服などがあり、日本の歴史が分かりました。(14才・女性)



三本鋤(飯岡新田)



法量(cm)



鋤(くわ)の原形は弥生時代の木製の遺物の中にも発見されることから、当時の稲作にも使用されていたことがわかります。古墳時代になると風呂という木の台に鉄の鋤先をはめた風呂鋤が使われました。江戸時代になると岡山県で備中鋤が現われ、全国にこの形の鋤が普及しました。多くの備中鋤は刃先が、土が付きにくいように3、4本に分かれ、ところによっては三本鋤、四本鋤ともいいます。粘質な水田で能率が上がるため、水田農家を中心に普及し、土の種類や耕起・中耕・除草など作業に合った形へと次第に変化していきました。また、この時代には犁(すき)とともに使用されていましたが、鋤は農家の間でもっとも広く使われていました。鋤の形は明治時代以降ほとんど変わっていませんが、工業技術の発達により材質が安定し、加工技術も近代化されたので刃の品質が揃い、大量生産ができるようになったため安くなりました。大正時代に入って、刃と柄の取付けが調節できる新しいタイプの鋤が作られるようになりました。動力付きの機械の発達により主要な農具ではなくなりましたが、今でも耕運機の入らない田畑で重宝される農具です。

引用資料／ 田原虎次 「稲作における農機具の変遷」 農林水産技術会議事務局 1990  
河出書房新社 「日本の生活道具百科4 働く道具」 1998

## となんの昔ばなし⑦

### 『津志田の大黒さん(つしだのだいこくさん)』

盛岡市呉服町(中ノ橋通)に高与旅館という宿屋がありました。そこに古びた大きな木彫の大黒さんがありました。顔の直径が一尺約三十センチメートル)以上もある大きいもので、ニコニコ顔をした典型的な頭部だけの大黒さんで、木彫で真黒くどっしりしたものです。扇形の厚い台板にとりつけられているので欄間(らんま・天井)の下の通風や明かりのための部分)にでも掲げて拝んだり眺めたりするようにできていました。

大黒さんは福の神です。主は商売繁昌家内安全によくかかっているのので気に入って、古道具屋から求めてきたものです。

さっそく、神棚のそばの欄間に掛けて拝み眺めていました。ところがその大黒さんがいつの間にか畳の上におりています。何かのほずみで落ちたのであろうと別段気にとめずに、元の位置に掛け直しておきました。二、三日したらまた畳の上に落ちていきます。こんな大きい重いものが落ちたのだから物音がするはずなのだが、誰も聞いた者もないし誰も手をかけた者もいません。不審に思いながらもまたその位置に掛けておきました。しかし、数日したらまた落ちていくではありませんか。「なんとしても不思議なことだ。これは何か深い因縁(いんねん)があるに違いない。」と、主は物知り(古い師)に聞いてみました。「この大黒さんは、もともと津志田に納められていたものだ。そのお社(やしろ)に帰りたくて何度掛けても下へ落ちるのだ。これは私物にすべきではない。すぐに津志田にお返しした方がよい。」といいました。主は驚いてすぐに津志田を訪れ、その大黒さんを大黒神社(だいこくじんじや)に奉納(ほうのう)しました。

津志田の老人たちの話では、昔このお宮の別当(べっとう)・職名の一つが金に困って、大事なお宮の大黒さんを売り飛ばしてしまったという言い伝えがあったといわれています。現在、大黒神社の拝殿(はいでん)にニコニコ顔の黒い大黒さんが掛けられて福々しく親しまれています。また一度も落ちたことがありません。大黒さんにこんな事があったら、高与旅館からお宮に帰ってきたのは、終戦後でもない頃です。その間、大黒さんはどこをどう渡り歩いたかまったく分からないし、高与旅館も今はありません。(終)

■ 出典『となんの民話』(都南歴史民俗資料館)